

優しさにたどり着くために

トップハムハット卿

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

彼は”ある噂”によつてクラスから孤立していた。

そんな彼と2人の姉。そしてその他の原作キャラとの日常を描く物語。

（あらすじでネタバレしたくないので、これだけ）

原作にはあまり沿つていません。

沿うところもところどころありますが、基本的には沿いません。

目 次

#1.	1話から同棲つて…
#2.	同棲生活は問題ばかり…
#3.	噂の真実…
#4.	くついたんですけど…
#5.	問題だらけなんんですけど…
#6.	ついに……!?

37 27 20 11 5 1

#1. 1話から同棲つて：

「これ……もしかして、のどか!?」

愛斗は読んでいる雑誌の記事を見て目を疑った。

『ネクストブレイクはこのグループだ！”“スイートバレット”』
プロフィールを見る限りでは、高校生ばかりのユニットらしい。

そのメンバーの一人、豊浜のどかを愛斗は知っている。

腹違いではあるが、のどかは愛斗の姉に当たる。

「中学までは黒髪だったのに、今では金髪とは…」

アイドルとは、やはり派手さも重要なのだろう。
でも、他のメンバーはみんな黒髪だ。

「よく分からんな」

アイドルの事情などさっぱり分からぬ。
今度会つた時に理由でも聞いてみようか。



「はあ……」

愛斗の口からは大きなため息がこぼれる。

学校に行くのを憂鬱に思う人も少なくはないと思う。

愛斗もそのうちの1人。

それに、愛斗の場合はどこからか広まつた”ある噂”のせいでクラ
スから完全に浮いていた。

「あと3年間もこれが続くと思うと、ほんと憂鬱だな」

まだ1年生の5月。この先の高校生活を考えるとさらに憂鬱だ。

愛斗が通う峰ヶ原高校は、七里ヶ浜のすぐ側にある神奈川県の高
校。

通学で使用する江ノ電は、ローカル線ではあるものの、毎朝の通勤
時間帯では賑わっている。

電車に乗り込むと、周りの学生は「昨日のテレビが！」とか、「宿題

が」と話している中、愛斗は誰と話すわけでもなく、静かにスマホの画面を見つめる。

学校の最寄り駅の七里ヶ浜駅に着くと、後ろから愛斗に声をかける人物が2人。

「おはよう、愛斗」

「おはようございます。国見さんに梓川さん」

「ん、おはよ」

彼らは愛斗が先日から始めたファミレスでのアルバイトの先輩であり、同じ峰ヶ原高校に通う先輩である。

学年は1つ違いだけど、気さくに話しかけてくれるとても良い先輩だ。

愛斗の席は、教室の真ん中の列の1番後ろ。

さ行だと、どうしても出席番号がその辺になつてしまふ。

同じクラスに話せる相手がない愛斗にとつては、退屈な席だ。せめて窓際が良かつた。

「あつ…」

前席の生徒の声とともに、愛斗の机の下に消しゴムが転がり込んできた。

「はい、どうぞ」

「あ、ありがと」

消しゴムの持ち主は、俯いてお礼を言つてくれた。

「朋絵(くわいひ)、早くこつち来なつて！」

「今行くー！」

呼ばれて去つていった。

「朋絵、あいつと関わつていじめられたらどうすんのよー？」

「あはは、ごめんごめん」

「俺はそんなにいじめっ子に見えるのかね…」

誰にも聞こえない音量でポツリと呟く愛斗。

愛斗は、過去に一度も人を虐めたりしたことはない。
むしろ、かなり温厚な方だ。

☆

学校が終わるとバイト先のファミレスに向かい、バイトに勤しむのが愛斗の日常だ。

今日もしつかりと給料分の働きをして、さつきタイムカードをスキヤンし終えて上がつたところだ。

「お疲れ」

「お疲れ様です」

佑真も同じ時間で上がりだつたらしい。

「あーそうだ。愛斗、昨日言つたこと考えててくれたか?」

「科学部の件ですか?」

「そうそう」

この峰ヶ原高校には科学部なるものが存在する。
部員は1人らしい……。

その唯一の部員の生徒から、愛斗はぜひ入部してほしいと佑真と咲太経由で勧誘を受けたのだ。

「バイトがある日は無理ですけど、それ以外の日なら。という条件付きでも良ければ入部したいなあなんて思つてます」

「おお! そりがそりが!」

佑真は後輩の嬉しい返事に大喜びだ。

「そんじや、早速明日の昼休みにでも双葉のところに行くか!」「了解です」

「じゃあ、また明日!」

「はい、また明日」

まつすぐ家に帰ると、玄関先に来訪者が座っていた。

「おつそい」

「は？」

その来訪者とは……

「こんな時間にどうしたのさ、のどか」

先日、雑誌で顔を見たばかりの人物。

アイドルグループ“スイートバレット”の豊浜のどかがそこに
はいた。

しかも大きなキャリーケースを持つて……。

旅行に来たついでにでも寄つたのだろうか。

「今日から、あんたの家に泊まるから」

久しぶりに会えた喜びよりも、この状況に理解が追いつかない。

「拒否権は？」

「当然無い」

「ですよね」

夜遅い電車で、女子高生であるのどかを1人で帰らせるわけにもい
かないため、この状況で愛斗に拒否権など無い。

この瞬間、愛斗とわがままお嬢様との同棲が決まったのだった……。

#2. 同棲生活は問題ばかり…

「おなか減つたから、何か作つてよ」

家に上がつて、のどかの第一声はこれだ。

急に押し掛けってきたうえにご飯までねだるとは、なんとも困々しい。

「俺もご飯まだだからちようどいいや、作るね」

メニューを考えながら、冷蔵庫の扉を開ける。

「あ・・・」

「どうかしたの？」

空っぽだつた。

バイトの帰りにスーパーに寄ろうと思つていたのに、すっかり忘れてしまつっていた。

「買い物しなきやいけないの忘れてた・・・。買い置きのカップ麺でもいい？」

「はあ？ 現役アイドルの晩御飯がそんな栄養のないもので良いと思つてんの？」

「そう思うなら、突然押し掛けることなんてしなければいい。

「分かつたよ、今から買いに行つてくるね」

「しようがないからアタシもついて行つてあげる」

「いや、いいよ。必要ないものまで買わされそ удだし」

「いいから、さつさと行く！」

わがままお嬢様、もとい姉の理不尽は相変わらずだなどため息をこぼす愛斗。

「のどか、これはもちろん自分でお金出すんだよね？」

愛斗の知らぬ間にカートには大量のオレンジジュースが積み込まれていた。

「あんたの家に財布置いてきた」

「はあ!? なら、このジュース返してきてよ」

「一度カートに入れたものを戻すのはマナー違反」「どの口が言つてゐるのさ。まつたく……さすがに、持つるのは手伝つてね？」

「分かつてるつつの」

なぜオレンジジュースばかりなのか聞いたたら「ジュースはオレンジ！これ常識だから」と教えてくれた。

「最近の常識つて難しいなあ」

買い物を済ませた帰り道、のどかの手には食材とジュースの入った袋、それに対しても愛斗はのどかの倍の数のジュースと食材を持たせられていた。

ちなみに、愛斗のほうは量が多いので段ボールに詰めてある。

「ねえ、あれって……」

愛斗の家の前に立つてゐる人物をのどかが見つけた。

「あ……姉さんだ」

愛斗とのどかに気が付き、こちらに向かつてくる。

「ずいぶんとたくさん買ったのね」

「半分以上は俺の買い物じゃないけどね」

少し居心地が悪そうにのどかが口を開く。

「麻衣さん、こんばんわ」

彼女は桜島愛斗の姉で元国民的人気子役（現在は活動休止中）の桜島麻衣だ。

「こんばんわ、のどか。愛斗、夕食に作つたハンバーグが余つたからお裾分け」

そう言つて麻衣はタッパーを渡してくれた。

「それじゃあ、おやすみなさい」

「うん、ハンバーグありがとね。おやすみ」

麻衣に会つたからか、家に帰つてからののどかは少し元気がない。

「・・・」

でも、愛斗が晩御飯を作り終え食卓に並べる頃にはすっかり元通りののどかになつていた。

「美味しい!! アンタは料理の腕はほんと一流よね」

母親と麻衣が忙しく、昔から晩御飯を一人で作つて食べる機会がかつたため、愛斗の料理の腕は今ではプロ顔負けレベルだ。

「ん~!! 美味しい! 愛斗の料理がこれから毎日食べられるなんて最高」

「同棲は良いけど、俺はのどかとは結婚しないからね」

「そーゆー意味じやないつつの! バカ愛斗!」

そんなやり取りもしながら、のどかのおかげで久しぶりにぎやかな晩御飯になつた。

麻衣から貰つたハンバーグも、凄く美味しかつた。

「あ、そうだ。お風呂の順番どうする?」

「んー、アタシは別にどつちでも」

「じゃあ、一緒に入る?」

「しね」

「ゴミを見るような目で愛斗を見るのどか。

「冗談だつて。俺が先に入っちゃうね」

これ以上ふざけるとさらに機嫌を損ねてしまうため、愛斗はそそくさと風呂場に向かう。

「アタシが入るつて答えても断るつもりのくせに」

一人になつたりビングでボツリとのどかが呟く。

愛斗が上がり、のどかもお風呂からあがるとまた問題が発生。

「アタシの脱いだ服は？」

「洗濯してもう干した」

「は？」

「心配しなくとも、ちゃんと洗濯機に入れて回したよ。もちろん、洗濯ネットに入れてあるから大丈夫」

脱衣所に脱ぎ捨ててあつたのどかの服も、ついでに洗濯しておいた。

「いや、そういうことじゃなくて！」

「あ、下着は手洗いしないとダメだつた？」

「違う!!」

「じゃあ何さ？」

「アンタに下着見られたくないの！」

顔を真っ赤にして訴えるのどか。

「べつにいいじやん、姉弟なんだし」

「良くないつつの！アタシの下着で変なことしてたら殺す」

「しないつて。のどかの下着に興味ないし」

「それはそれでムカつく!!」

理不尽な怒りをぶつけられ、どうしようもない愛斗。

下着の件は置いておいて、もう一つ問題があつた。

「のどか、寝るのどうする？」

「アンタの部屋の床に布団敷いて寝る」

「うちに来客用の布団なんて無いよ？」

「はあ？なら、どうすればいいのよ」

「それは俺のセリフだつて・・・」

泊まりに来る友だちもいなため、愛斗は自分のベットと布団しかもつていない。

「明日、のどかの布団と一緒に買いに行こう。放課後予定空けておいてね」

「うん」

「今日は俺がリビングのソファ、のどかは俺のベット。これでいい?」「アンタのベットで寝るのは嫌だけど、仕方ないから我慢してあげる」ベットを譲ったのに…と言いたい気持ちを、ここはグツとこらえる。

「はいはい、ありがとうございます。それじゃあおやすみ」

「ちよ、ちよつと待つて!」

「はい?」

「まだ眠くないから、少し付き合つて」

そう言つて、愛斗を隣に座らせる。

「分かった。のどかが眠くなるまでね」

「アンタはさ……、聞かないの?」

「ん?」

「アタシがここに来た理由」

「俺のご飯を食べるため?」

「真面目に聞いてんの」

ふざけるとすぐ睨まれる。

昔から、のどかは少し冗談が通じにくい。

「また母親と喧嘩したのかなあとは思つてた」

「やっぱそうだよね。アタシの家出する理由なんてそれくらいだし」

「どうして麻衣姉さんのとこじゃなくて、俺のところなの?」

「そ、それは……、麻衣さんは芸能界の先輩だから……」

腹違いの姉妹とはいえ、芸能界の先輩でもある麻衣を頼るのはのどかには厳しい。

アイドルもいろんな苦労があるらしい。

「そう言えばアンタは、高校はどうなの?」

中学生の時、愛斗に起こつたことを知つているのどかとしては、愛斗が高校では上手くやれているのが少し、いやかなり心配していた。

「まあぼちぼちだよ……。ねえ、眠たくなってきたからリビングに帰つていい?」

「ダメ。まだ話したいことがあるし」

「それは言つても…」

「それくらい我慢しろつつの」

「えー」

我慢しろと言われても、人間は睡魔に抗えないのだからしかたがない。

「アンタが変なことしないつて誓えるなら、このベット一緒に使わせてあげる」

「それは遠慮しどうかな…」

さすがに姉弟で1つのベットで寝るのは愛斗も躊躇ってしまう。

「遠慮するなつての！」

無理やり愛斗の腕を引っ張つてベットに寝かせる。

「はあ、分かつたよ。でも、狭いつて文句言わないでね？」

バイトの疲れもあつたせいか、愛斗は横になるとすぐ眠りについた。

幸せそうな寝顔の弟に向かつて、のどかは呟く。
愛斗

「アンタはこれくらいの荒療治が必要なのよ。

アンタの心の傷はアタシアタシが絶対に治してみせる。
だから、姉にくらい心を開けつつの」

のどかがなぜ愛斗の家にしばらく住むことにしたのか、母親と喧嘩したというのはもちろんホントの理由だが、真の理由は愛斗が昔負った心の傷を治すため。

「ほんと、世話がかかる弟なんだから…。おやすみ…ちゅつ」

愛斗の頬にキスをし、のどかも眠りにつく。

#3. 噛の眞実：

「ん……、狭い」

何かに締め付けられるような感覚がして、愛斗は目が覚めた。
その正体は、のどかだ。

「そういえば、のどかは寝相悪いんだつた」

幸せそうな寝顔ののどか。

それはいい。問題は愛斗を抱き枕の如く抱き締めていること。
しかもガツチリとホールドがキメられているのでなかなか抜け出せない。

「困ったな……」

いつまでも寝ている訳にはいかないので、上手く身体をくねらせて脱出する。

朝ごはんを済ませ、愛斗とのどかはそれぞれが通う高校へと通学する。

学校の制服を持つてきたのか心配だったが、大きなキャリーケースにバツチリ入つていた。

昼休み、愛斗は佑真と咲太と一緒に理科室を訪ねることになつてい
た。

「君が噂の1年生？」

「おい、双葉……」

「あ、ごめん。そういうつもりで言つたんじゃない。梓川と国見から君のことを聞かされるから、ついね。気を悪くさせたなら謝るよ」

少し無神経だつたと、理央は謝る。

「気にしてないので大丈夫ですよ。それで、なぜ俺なんでしょうか」
愛斗は佑真と咲太から科学部への勧誘を受けた時点から、この疑問
を抱いていた。

「それは簡単だよ。君は頭がいい、しかも文理問わず。

そんな君が科学部の活動に力を貸してくれたらかなり活動の幅が広がるんじやないかと思つたから」

「ありがたいお言葉なんですが、俺が入ると風評被害を受けると思うのでとても迷惑をかけちやいます」

「それは気にしなくていいぞ。双葉も『変人』つてあだ名付いてるから」

いつも白衣を来て いる理央は、『博士』や『変人』といった呼び方をされることがよくある。

まあ、そう言う咲太もまた、とある噂によつてクラスから浮いているわけだが……。

「梓川に言われたくはないね。でも、梓川の言う通りだよ。私はそんなこと気にしないから」

「バイトのある日は参加できませんが……」

「それでかまわない。君が暇な時に来てくれるだけでもありがたい」

どうやら、愛斗が思つてた以上に理央は勧誘に本気らしい。

「分かりました。それなら入部させていただきます」

それなら断る理由は無い。

愛斗は科学部に入部することに決めた。



「可愛いの買えて良かつたー！」

昨日約束していたのどかの布団の件で、買い物に來ていた2人。

氣に入つたのが買えたらしく、のどかはとても上機嫌だ。

「まさか、僕のベットよりも高いとは……」

のどかとは反対に、テンションが下がつて いる愛斗。

最近は布団も質の高いものは、お値段がけつこうするらしい。

「これも必要経費と割り切るしかないか……」

「そうよ、そんな小さいこと気にしない気にしない！」

「人のお金だからって高い布団選んだくせに」

「そんなに言うなら、アンタも寝かせてあげるわよ」

「いや、それはいいや」

「あつそ、じゃあ絶対寝かせないから」

どの口が言えたことだろうか。

「のどか、ちょっとこれ持つてて」

「はあ？ あ、ちょっと!!」

何かを見つけたらしく、駆け足でそちらに向かう愛斗。

目線の先には、男二人と女の子が一人。

「もしかして、君一人い？」

「お兄さんたちと遊ぼうよお」

「え、えっと……」

いかにもつて感じのキャラキャラした輩に絡まれている女の子に、愛斗は見覚えがあった。

「どういうお兄さんたちはナンパですか？」

「あ”?なんだお前は?」

「この子の彼氏ですよ」

「チツ、彼氏持ちかよ。……行くぞ」

捨て台詞も”いかにも”つて感じだ。

絵に描いたような輩で、少しおかしく思つてしまふ。

「あんなのに絡まれたら、はつきり断らないとめんどくさいよ。次からは気をつけたほうがいいかも。それじゃあ、ばいばい」

「ま、待つて！桜島くん！」

彼女の静止も聞かず、その場を離れる愛斗。

「遅いつつの！いつまでこんな重いものをアタシに……つて、その子は誰？」

強引に別れたはずの彼女は、愛斗に付いてきていた。

「私は、古賀朋絵です。桜島くんのクラスメイトの…」

「なんで付いてくるのさ。古賀さん」

「ちゃんと…、ちゃんとお礼が言いたいからだよ！」

「お礼なんていいよ。それより、俺と話してるのを他のクラスメイトにでも見られたらどうするのさ」

朋絵はクラスカーストトップのグループに所属しているため、余計に心配になつてしまふ。

「それは……」

「ちよつと待つて、それどういうこと？」

険しい表情をしたのどかが、2人に尋ねる。

「なんでも無いよ。早く帰ろう、のどか」

「アンタは黙つてて!!」

珍しく、のどかが本気で怒つている。

「アタシ、古賀さんと話があるから。愛斗は先に帰つてて」

反論したら殺すと言わんばかりの剣幕で言うのどか。

愛斗は素直に従うしかなかつた。

「ついてきて」

そう言つて、のどかが朋絵を連れてきたのは近所の公園だ。

「座つて」

2人でベンチに腰掛ける。

「古賀さん…だつけ？」

「は、はい。そうです」

ナンパの次は、金髪の女に絡まれるという事態に、朋絵は今日の自分が不運を呪つた。

「アタシは愛斗の姉の豊浜のどか。

いきなり質問して悪いけど、もしかして、高校で愛斗の変な噂流れてる？」

「……はい。中学の時の噂が…」

「はあ…、やつぱりね……。」

それ、嘘だから。愛斗はいじめなんて今まで1回もしたことない。
むしろその逆。アイツはいじめられてる子を守ろうとしてた」
中学の頃、愛斗の仲の良かつた友達が些細なことでクラスメイトから無視されるようになつた。

でも愛斗はいつもと変わらず、その子に接していた。

中学生の時は特に、無視などの嫌がらせはエスカレートしやすい。
その子への嫌がらせも、無視からだんだんいじめへと変化した。
グループチャットで悪口を書かれ、机には落書きされ、終いには家の電話にもいじめっ子たちからの電話が来るようになつた。

そんな中でも、愛斗はその子への態度をえることはなかつたのだ。

それだけではなく、担任の先生にいじめのことを相談した。

だけど、「本人が先生に直接言わないから」と取り合つてはくれなかつた。

いじめが続くようになつて、その子はやがて不登校になつた。

だから愛斗は部活が終わると毎日、その子の家にその日の授業の内容をまとめたものや連絡物を届けに行くようにした。

その時期くらいから、愛斗は周りから避けられ始めた。

いじめられっ子を庇うということは、周りの流れに逆らうことと同じ。

”多數が正義”そんな空気を作り出している集団に逆らうのだから、それも当然の流れなのかもしだれない。

そんな状態が少し続いたある日、その子が久しぶりに登校してき
た。

でもその子はいつもと様子が違う。

愛斗を少し避けているようにも思えた。

そして、いじめっ子たちとも仲良く話していたのだ。

異変を感じつゝも、その子が無事学校生活に帰ってきたことを嬉し

く思つた愛斗は、気にしなかつた。

その日の昼休み、愛斗は生徒指導室に呼ばれた。中に入ると、担任と生徒指導の先生、いじめられた子、そしてなぜか愛斗の部活の顧問がいた。嫌な予感がした。

愛斗が椅子に座ると、担任が口を開く。

「皆さんに集まつてもらつたのは、ここにいる白石くんがある生徒からいじめを受けていると私に話してくれたからです。白石くん、先生に話してくれたことをそのまま、ここで話してください」

そう言われ、白石も話し始める。

「僕は、いじめを受けています。この1ヶ月本当に辛かつたです」「さぞ辛かつたでしょう。先生達はあなたの味方です。怖がらずにあなたをいじめていた生徒の名前を教えてください」

芝居めいた話し方で担任はそう言つた。

「はい……」

一呼吸置き、白石は続けた。

「愛斗くんです。そこにいる桜島愛斗くんです」

「え？」

一瞬、何を言つているのか分からなかつた。

「桜島くん、それは本当ですか？」

本当なはずがない。愛斗はいじめられていた白石をずっと味方していたのだから。

「いや、違います。だつて俺は……、いじめていたのは橋本たちの方です。白石くん、なにを言つてるんだ？」

「先生、そいつ嘘ついてます。僕達は白石くんを桜島のいじめから守つていました。そうだよなあ？ 白石」

「う、うん……」

愛斗はこの瞬間、ハメられたのだと気づいた。

いじめっ子のリーダー、橋本の親は地方議員で、おそらく担任と白石は買収されたのだろうと。

「白石くん、ホントのことを言つてよ」

「うるさい！僕はホントのことを言つてる！」

いじめられるのはもう嫌なんだよ！

「やつぱりそうなんですね」

違う。

「俺たちに罪を擦り付けようとするなんて、最低だな。桜島」

違う。違う。

いじめてなんていない。

守ろうとしただけなのに。

「違う……！ 違います監督！ 僕はやつてません！」

部活動で信頼してくれていた監督なら、信じてくれるだろうと愛斗は願った。

「この状況で、まだそんなことを言うのか」

蔑むような目で顧問は愛斗に言つた。

「桜島。お前はもう明日から部活に来なくていい。

お前みたいなやつは、チームの輪を乱すだけだ」

「そんな……」

なにがいけなかつたのか。

自分は間違つたことをしていたのだろうか。

自分のやつてきたことは正しいと信じてたのに…。

いじめられている彼を救うために尽くしてきたのに。

愛斗は、裏切られたのだ。

そして何よりショックだったのは、信頼していた顧問にさえも裏切られたこと。

そう思つた瞬間、愛斗の心の中で大事な何かが崩れた音がした。

「——愛斗はその後、高校への推薦状の取り消し、所属していた野球連盟からは追放。

プロ野球選手を目指して愛斗にとつてはきっと、それが1番辛かつたと思う。

それ以来、愛斗は誰にも心を開かなくなつた。誰も信頼しなくなつた。

友達だけじゃなく、家族であるアタシやお姉ちゃんにも。

心を開いているように見えるかもしれないけど、あの子は昔から人付き合いが得意だったからそう見えるだけ。

心の奥の扉は、あの日から1度も開いたことはないの」

一通り話しあり、一呼吸置く。

「これがことの真相。まあ、信じるか信じないかは古賀さん次第……って、何で泣いてんの!?」

のどかの話を聞いている朋絵の頬には、いつの間にか涙が伝つていた。

「すみません……だつて、だつて！」

「こんなのつてあんまりにも……

みんなにも伝えなきや」

「それはダメ」

「なんですか!?」

みんなの誤解を一刻も早く解きたい朋絵は、のどかが止める理由が分からぬ。

「アンタがみんなにそのことを伝えて、信じてもらえなかつたらどうすんの? 浮いてるやつの味方をする人は、今度はその人も輪から外されるのよ。愛斗を庇つたせいで古賀さんが孤立することになつたら、1番責任を感じるのは愛斗。だから古賀さんは、ホントのことを見

かつてくれただけで十分

のどかの言葉にぐうの音も出ない。

「この話はこれくらいでお終い。長話に付き合わせてごめん。気をつけて帰んなよ？」

「は、はい」

そうは言われたが、朋絵はこれから学校生活はどうするべきかを
帰り道であれこれ悩みながら帰つていった。



「ん……、狭い」

目が覚めると、身体がまた動かなくなつていて。

「またか」

またものどかにホールドされている愛斗。

きつとのどかは寝ぼけて愛斗のベットに入り込んだのだろう。
「せつかく買ったのに使わないのはどうなんだ…」

のどかの寝相の悪さに、やれやれとため息をこぼす。

わがままお嬢様との同棲は、まだまだ問題は山積みだ。

#4. くつついたんですけど…

ある日の昼休み、教室の一角でクラスのカーストトップに君臨する女子たちの恋バナが行われていた。

「クラスで1番カツコイイのって、ぶつちやけ誰だと思う？」

「んー、サツカー部の北山くんとか？」

「あー、分からなくもない。朋絵は？」

話を振られ、少し戸惑う朋絵。

都会の学校に慣れるのに精一杯で、男子のことなんて今まで意識する余裕は無かつた。

それでも、なんとかクラスの男子を思い出しながら答える。

「えーっと、顔だけなら桜島くん…かな」

「たしかに顔はめっちゃイケメンだけど、いじめっ子はダメでしょ」「顔だけは良いのにねー」

リーダーの玲奈の言葉に他のふたりも同調する。

「その噂のことなんだけどさ、実は何かの勘違いだった……って可能性は無いかな？」

少し口に出すのは勇気がいったが、先日のどかの話を聞いた手前、朋絵の中の正義感が言わぬることを良しとはしない。

「どうこと？」

「え、えっと、なんというか、普段私たちが見てる桜島くんって凄く大人しいから、ほんとにいじめなんてしてたのかなあって」

玲奈は愛斗の噂を聞いたときから、愛斗を毛嫌いしている。

だから余計に言いづらかった。

でも、言つてしまつたのだから後はもう機嫌が悪くならないことを祈るだけ。

「んー、言われてみればそうかも」

意外にも、玲奈は納得してくれた。

玲奈がそういえば、もちろん他のふたりも同じだ。

そして、日奈子がニヤニヤしながら朋絵を見る。

「もしかして朋絵、桜島のこと好きなの？」

「そ、そんなんじやないよ！」

「照れなくてもいいって～！」

いつの間にか、あらぬ誤解が生まれていた。

「ここは、朋絵のために一肌脱ぎますか～」

「そうだね。応援する。でも、まずは桜島の噂のことからね。もし事実だつたら、ウチらの朋絵をそんな怖いやつと付き合わせるわけにはいかないし」

「みんな、ありがと…。あはは」

心配しすぎな気もするし、そもそも朋絵は愛斗のことを好きなんて一言も言つていないので、そういう流れになってしまった。

みんなが愛斗の噂について疑い始めたのは嬉しいが、困ったことに新たな誤解を産んでしまったために、なんとも言えない心境の朋絵であつた。



「ああ～、どうしよ～!!」

先日の愛斗の件とは別に、また新たな問題が増えた朋絵。
その問題というのは……

「前沢先輩は玲奈ちゃんが狙つてるのに…！」

なのに告られるとか空氣読めてなさすぎ～！」

この学校のバスケ部で1番上手い、そしてカツコイイと評判の3年生、前沢先輩に今日の昼休みに告白されてしまったのだ。

というのも、玲奈の誘いで最近はバスケ部の練習を見に行くことが多くなり、先輩に顔を覚えられた。そうしたら告白されてしまったのだ。

「どげんすればいいとね！わからん！いつちよんわからん！」

枕に向かつて叫ぶ朋絵。

取り乱すあまり、出身である博多の言葉が出てしまっている。

付き合うのはもちろん論外だが、振るのもダメ。

そもそも、告白されてしまった時点でアウトなのだ。

でも告白されてしまったものは仕方ない。

時間を戻すことなんて朋絵には出来ない。

悩んでいると、1つの名案が浮かんだ。

「そうだ!!

玲奈ちゃんが前沢先輩以外の人を好きになれば、私が前沢先輩を振つても問題無いよね?」

「それしかないよ!

お願いします!玲奈ちゃんが前沢先輩以外の男子を好きになりますように!

前沢先輩以外の男子とくつづきますように!!!
前沢先輩からの告白が発覚する前にそうなってくれと、今はそう願うしかなかつた。



【朋絵 side】

次の日の朝。

朋絵は昨日の告白の話が玲奈の耳に届いていないか、気が気で無いため、朝からソワソワしている。

「あ、朋絵。おはよー」

「お、おはよー玲奈ちゃん」

「朋絵、なんか調子悪い?」

いつもと朋絵の雰囲気が違うことに気づき、少し心配する玲奈。

「そんなことないよ!元気元気!」

「そ、ならしいけど」

そんなことを話しながら、教室へ向かう。

教室へ入ろうとしたその時、玲奈が誰かとぶつかった。

「きやつ！」

その瞬間、朋絵の目の前が一瞬だけ眩んだ。



【愛斗 s.i.d.e】

最近になつてものどかの寝相は相変わらずで、愛斗は今朝も蛇に食べられそうになる夢を見ることになった。

そろそろ蛇とは顔馴染みの仲良しさんになれそうだ。

そんないつもと変わらない朝を過ごし、学校へ通学する。教室も1日学校なのかと少し憂鬱な気分ではあるが、避けられるものではない。

教室で自分の机に座り、読書をしていたが、トイレに行きたくなつて愛斗は席を立つた。

教室から出た直後、誰かとぶつかつてしまつた。

「きやつ！」

その瞬間、目の前が一瞬だけ眩んだ。



眩しさから目を閉じたが、目を開けるとそこには朋絵がいた。ぶつかつた相手は朋絵だつたのかと気づく。

「ごめんね、古賀さん」

「え、古賀さん？」

不思議そうな顔で聞き返す朋絵。

「急に苗字で呼ぶなんてどうちやつたの？玲奈ちゃん」さすがに人違いにもほどがある。

クラスのリーダーともいえる香芝玲奈と自分を間違えるなんて。

そもそも、愛斗は男で玲奈は女、間違えるわけがない。

「それにしても、さつきぶつかつたのって桜島くんだつたのかな？どこに行つちやつたんだろうね」

理解が追いついていない愛斗の中から、声が聞こえてきた。

「痛いなー、まったくどこ見て歩いてんのよ……ってあれ？ いない？」

その声を聞いた瞬間、愛斗は一つの可能性に行き着いた。

そして手洗い場の鏡の前へと走る。

「え、あ、ちょっと身体が勝手に!!

これどうなつてんの!?」

頭の中からそんな超えが聞こえてくるが、今は無視だ。

この目で何が起きたのかを確認するしかない。

「はあ、はあ、はあ」

鏡の前で自分の姿を見ると……、

「嘘……だろ……」

そこには香芝玲奈の姿が映っているのだ。

「なんで俺が香芝さんになつてるんだ!?」

「はあ？ アンタどこから喋つてんの？」

周りを見ても愛斗の姿は無い。

でも愛斗の声は聞こえる。

そんな奇妙な事態に、玲奈の理解も追いついていない。

「香芝さん、そ、どこから喋つてるのさ」

「アタシはもちろん……」

そう言いかけて、玲奈は一つ気がついた。

「私は動いてるつもりは無いのに、身体が勝手に……」

玲奈は意図していないはずなのに、なぜか腕が、指が、そして口が動いている。

起こつてることを理解した途端、強烈な寒気に襲われる。それと同時に、全てが繋がった。

いや、繫がつてしまつた。

「あたしの中に……、桜島がいる???

「……そういうことだね。香芝さん……」

なんと、香芝玲奈と桜島愛斗が物理的に、いや、これを物理的と言つていいのかは置いておいて、とにかくくつついてしまつたのだ。

そこへ、遅れて朋絵が合流する。

「急に走つていくから、驚いたよ。はあ、はあ」

「朋絵、どうしよう」

深刻そうな顔で言われ、朋絵も少し身構える。

「アタシ、桜島とくつついちゃつた」

「…………へ？」

自分たちでも完全に理解できている訳では無いが、事の次第を朋絵に伝える愛斗と玲奈。

「てことは、玲奈ちゃんの中に桜島くんがいるつてこと?」

「そう」

嘘のようなホントのことには、3人は頭を抱えるしかなかつた。



玲奈と愛斗の2人は、第三者から見て消えてしまつた愛斗はどういう扱いになつてゐるのかを知るために、ただ今いろいろと探索中だ。「名前はおそらく、”香芝玲奈”から”香芝愛奈^{まな}”に変わつてる。そして桜島愛斗は元々存在していないという扱いになつてゐる。ただし古賀さんだけは俺の事を覚えてる。そんな感じっぽいね」

「そうね……つて、なんでアンタはそんなに冷静なのよ」

「慌てたところで、解決するわけじやないからね」

「それはうだけど……、まあいいわ」

他に分かったことと言えば、口に出さなくても会話が出来ること。意識は2つあるが身体は1つしかないため、脳内で会話ができる。アニメやマンガで見かける、自分の中の天使と悪魔みたいな感じだ。

それと、喋るのは基本的に玲奈だ。

だけど愛斗も喋れないわけではない。
お互いの意思で、交代できるのだ。

今のところはそれくらいしかまだ分からない。

「俺と香芝さんが離れる日は来るのかな…」

「来てもらわないと困るわよ。アンタとこのまま一緒なんて絶対

嫌】

「よし、授業始めるぞ！」

先生の号令と共に授業が始まる。

「今日は、抜き打ちで小テストをやるぞ。点数悪かつたやつは補習な」

「補習なんて冗談じゃないわ。放課後は朋絵たちと買い物に行く約束なんだから」

意気込む玲奈だが、中間テスト前のこの時期なので、問題作成者側にも気合いが入る。

ざつと目を通してもなかなか難しい問題が並んでいる。

「ちょっと貸して」

悩んでいる玲奈を見兼ねて、愛斗が代わりに腕を動かす。

「す、凄い…」

自分の腕が勝手に動き、みるみる解答欄を埋めていく。

あつという間に解き終えてしまった。

「これ……便利かも」

すっかり忘れていたが、愛斗は入試の成績はクラスで1番良い。自分の中にクラスで1番成績がいい愛斗を宿しているメリットを見つけた玲奈だった。

#5. 問題だらけなんですけど…

くつついでしまった愛斗と玲奈に、新たな問題が発生した。

それは、トイレだ。

「ちよつと、これトイレってどうすればいいのよ」

「まあ、身体を共有してるんだから仕方ないんじゃない？」

「仕方ないって何よ！ アンタにトイレしてるところ見られるなんてありえない」

愛斗に限らず、他の人に見られるのは嫌。

当然の考えだろう。

「そんなこと言つたつて、どうすればいいのさ」

「目を閉じてればいいの！」

「いや、それだと香芝さんも前見えないよ？」

身体を2人で共有しているのだから、玲奈が見るものは愛斗も見ることになるし、逆に玲奈が見ないものは愛斗にも見ることは出来ない。

「それでもいいの！ アンタに見られるよりはマシ！」

必死に訴える玲奈。

逆の立場だつたら確かに嫌だなと愛斗は思う。

でも、これからずつとトイレでは目を瞑るつもりなのだろうか。そんなことを考えながら、愛斗は視界が明るくなるのを待つた。



放課後、いつも通り朋絵たちと共に帰る玲奈。

だが、愛斗とくつついでしまったせいで、いつも通りの玲奈ではいられなかつた。

「愛奈ちゃん、今日はなんかいつもと少し雰囲気違うね？」

そう聞いてきたのは日奈子だ。

「そ、そう？」

「私も思つた。体調悪いとか？」

亜矢も続く。

「そんなことないって。ねえ？朋絵」

とりあえず、朋絵に助け舟を求めておく。

「うん、いつもの玲・愛奈ちゃんだとと思うけどなあ」

だが2人はまだ納得していない様子だ。

愛斗とくつついたことをさすがに話す訳にもいかない。

おそらく信じてはもらえないだろう。

となると、この状況が解決されるまではあまり一緒にいないう方がいい。

ごめん、用事思い出したわ。先に帰るね」

3人にはそう言って、逃げるように帰宅した。

「——はあ…。ほんとこれからどうすればいいの……」

ベットの上で仰向けになり、何度も目が分からぬいため息をつく。

「中間テストも近いし、勉強するべきなんじやない？」

「そーゆーこと言つてんじやない！」

愛斗からのズレた返答にイラツとする玲奈。

「原因が分からぬいために、この状況の解決策を考えるのは無理だよ。

それならテスト勉強したほうが絶対いい」

「こんな状況で勉強なんか出来るわけないじゃん！大体、アンタの意見なんか聞いてないし！」

「そんなこと言つたつて……」

「黙つてて。大嫌いなアンタが私の中にいるつてだけでも無理なのに、指図されるなんてもつと無理」

不満を心の中の愛斗にぶつける。

「分かつたよ」

そう言うと、愛斗は一切口を開かなくなつた。

「これどうやつて解くのよ……」

勉強はやらないはずだったが、明日提出の課題があつたことを思い出し、机で教科書と睨めっこをしている。

だが、この課題がなかなかに難しい。

さつき愛斗にあんなことを言つてしまつたので、愛斗には頬りたくない。

しばらく悩んだが……解けなかつた。

「ねえ、これどうやるの？」

「……」

「ねえ」

「……」

「ねえつてば！」

愛斗からの返事は返つてこない。

その代わりに、手が動いた。

「あつ…」

スラスラとシャーペンがノートの上を駆け、あつという間に解けた。

しかも、ご丁寧に解説もついている。

「すゞい…。しかも、超分かりやすい」

さすがはクラストップの頭脳と感心する玲奈。

それと同時に、愛斗への罪悪感も湧いてくる。

「あのさ、さつきはごめん…。強く言いすぎた」

「ちちらりそごめんね。もつと香芝さんの気持ちも考えて喋るべきだつた」

「[….]」

氣まずい。

共感する人も少くないと思うが、喧嘩した後お互いが仲直りのために謝り合う時、少し気まずくなることがある。

今はまさにそれだ。

何か話題は無いかと考えていると、ふと朋絵が言つていたことを思い出した。

「ねえ、アンタつてさ、ホントにイジメなんてしてたの？」

「唐突だね。古賀さんに何か言われた?」

「朋絵は関係ない。私が疑問に思つただけ」

「なんですか?」

「別に、なんでもいいじやん。いいから答えてよ」

玲奈がクラスの中で一番噂を妄信していたと言つても過言ではない。

それなのに噂のことを聞いてくるということは、朋絵から何か聞いたんだろう。

愛斗はそう確信していた。

「んー、どうなんだろうね。みんながそう言うんだから、俺は虐めてたんだと思う

「なんでそんなに曖昧なの」

「俺の昔のことはどうでもいいよ。それより、宿題の続きをやらないと」

そう言つて、愛斗は玲奈の代わりに宿題を解き進める。

「ちょっと、話を逸らさないでよ」

「俺はその話をあまりしたくないんだ」

「…あつそ。なら聞かない」

朋絵の言う通りなのかは分からないが、愛斗の“いじめ事件”の噂の裏には何かがあると玲奈は確信した。

☆

「そろそろお風呂入ろうかな…」

「随分遅いんだね」

「女子はだいたいこれくらいの時間に入るよ」

「へえ。俺は晩御飯食べたらすぐ入る派」

「あつそ」

脱衣場に来て、気がついた。

「ちょっと待つて、まさかお風呂もアンタと一緒に？」

「まあ、そうなるね」

「裸を見られるなんて……最悪」

「また目隠しでもする？」

「文句を言われても、愛斗にはどうしようもない。」

「いい！あーもう！裸でもなんでも見なさいよーこの変態！」

やけつぱになつた玲奈から理不尽な言われようの愛斗。

「俺は別に、見たくないんだけど」

「は？それはそれでムカつく」

「うそそそ。わー、とつても見たいなあ」

「は？きも。死んで」

なんて理不尽な。

そんなやり取りをしながらも、服を脱ぎ終えてお風呂場へと入る。

「感想は？」

「は？」

「だから感想！ 私の裸を拝んでおきながら、何も感じないわけないでしょ！」

「香芝さんって着痩せするタイプだつたんだね」

「驚いた？スタイルには自信ある」

「へえ」

「それだけ？他に無いの？興奮したとか」

「香芝さん、欲求不満なの？それとも、見られて興奮するタイプの人？」

「ち、違うわバカ!!」

真つ赤な顔で否定する玲奈。

「はあ、これからお風呂の時は毎回こうなるのかと思うと憂鬱…
頭を抱える玲奈であつた。

☆

そんなこんなで、くつついでから1週間が経つた。
愛斗と玲奈はどうなったのかと言ふと……

「これ、いつになつたら終わるの？」

「それは俺が聞きたい」

まだくつついたままだ。

でも、この一週間で2人の距離はかなり縮まつた。
物理的な距離は0だが、精神的な距離も縮まつたのだ。

1週間も一緒に過ごしていれば、自然とそうなるものかもしれない。

そんなある日の帰り道。

「あれ、君つて1年の子だよね？」

声をかけられた。

その相手は、同じ峰ヶ原高校の3年生で男子バスケ部の上沢先輩だ。

「そうです！」

憧れの上沢先輩から声をかけられ、玲奈は目をキラキラさせながら返事をしている。

「いつも練習見に来てる子だよね？ 可愛いから覚えたよ
「そ、そんな！ 可愛いだなんて！」

玲奈はとても嬉しそうだ。

玲奈が”上沢先輩のことを狙つている”と、この一週間で何十回と聞かされてきた愛斗は2人のやり取りを見守っている。

でも、愛斗には1つ気がかりなことがあつた。

それは上沢先輩の噂だ。

玲奈とくつつく前に、佑真から聞いたことがあつた。

バスケがこの学校で一番上手い。大学生の彼女がいる。

そして、今の彼女が全然やられてくれなくて欲求不満らしい。信じているわけではないが、佑真が言つていたということもあつて

絶対に嘘だとも思えない。

もし本当だつたら、どうすればいいのか。

そんなことを考えていた。

「よかつたらさ、俺と付き合わない？」

そう言われた直後、お尻に不快感を感じた。

「きやつ」

上沢先輩が玲奈のお尻を触つてきたのだ。

「あ、あのー、これは…？」

「ん?ダメだつた?」

頭がおかしいのだろうか。

オツケーなわけがない。

「え、えつと…」

そう言つて いるうちに、だんだんとエスカレートし、今度はお尻を揉み始めた。

さすがに玲奈もマズいと思つたのか、拒否を見せる。

「ちよ、やめてください」

「えー、いいじyan。それに、体は気持ち良さそうじyan?」

A Vの観すぎではないだろうか。

愛斗にとつては気持ち良さなどない。嫌悪しかない。

でも玲奈の憧れの先輩なので、どうするかは玲奈に任せらしかな

い。

気がつけば先輩の顔が間近にあり、キスをしようと迫つてきている。

玲奈の体は震えていた。

震える玲奈の唇は小さく、こう呟いた——

「……助けて……」

その瞬間。

「——うつ!?」

先輩が急にうめき声をあげる。

どうしたのかと思い、下を見ると…

自分の膝が先輩の股間に直撃していた。

「え!?

あまりの衝撃に膝をつく先輩。

「痛えな、コノヤロー」

立ち上がるこうとする先輩の顔面に、自分の足が振り抜かれた。

「ぐはっ!!」

その時点で、自分の意思で身体は動いていないと玲奈は気づいた。

「すなわち、愛斗が動かしているのだと。

「ふざけんじやねえ!」

「ふざけてるのはどつちだ! 後輩にレイプ紛いのことしやがつて。玲奈は、あんたに憧れを抱いてた! 毎日毎日、あんたを見ては「かっこいい」だの「好き」だの言つて嬉しそうにしてたんだよ! なのに、あんたは玲奈に何をしようとしてたんだよ!!!」

そう叫んで、先輩の股間にさらに強烈な蹴りをぶち込む。

「ぐはっ!!」

そして残りライフが0:というかオーバーキルされた先輩の胸ぐらを掴む。

「次、玲奈に手を出そうとしたら、あんたのそれが一生使えないようにしてやるよ。もちろん、他の女の子に同じことをしようとしてもだ。分かったか?」

股間へのキックが効いたのか、怯えるような目でこちらを見る先輩。

「分かつたら返事!」

「は、はい！もうしません！」

そう返事をすると泣きべそをかいて逃げていつてしまつた。

周りに誰もいなくなり、愛斗はふと我に帰る。

「もしかして、やばかつた？」

「当たり前じやん！明日からどうすんのよ！」

「あーー、ごめん！」

「もう、ホント信じられない……。もうバスケ部の練習見に行けなくなつちやつたじやん…」

「ほんとごめんつて」

「でも……ありがとね。先輩には失望した」

「そつか」

「アンタのせいで失恋した」

「ごめんつて」

「許さない」

そう言いながらも、玲奈は少し嬉しそうだ。

「でもさ、なんで助けてくれたの？」

「男に尻を触られるのが耐えられなかつたから」

「はあ!?てことは私のためじゃなくて自分のためにやつたの!?」

「まあ、そうなるね」

「私の感謝を返せバカ！」

理由を聞いて玲奈は呆れている。

「まあ、結果的に香芝さんのためにもなつたから良しつてことで」

「はあ…、まあいいわ。てか呼び方！」

「へ？」

「さつきは玲奈つて呼んでくれたのに、今は香芝さんなんだ？」

「ダメ？」

「アンタのせいで失恋したんだから、罰として玲奈つて呼ぶこと！」

「いい？」

「わかつたよ、玲奈」

「それで良し。さつきはありがとね、愛斗」

最低な先輩のおかげで、2人の距離はさらに縮まったのだった。

#6. ついに……!?

少しづつ日中の気温も高くなり始めてきた6月。

季節はもう初夏だ。

2人がくつついて、そろそろ1ヶ月が経とうとしていた。終わりの見えなかつた共生は、不意に終わりを迎えることになる。

「ねえ、もしかして俺たちはずっとこのままなの？」

「んー、どうだろ。何をすれば元に戻るのかが全然分かんない」

「前みたいに『早く戻りたい！』って騒がないんだね」

「騒いだところで戻れないって、この1ヶ月で嫌という程感じさせられたから。それに、別に私はこのままで困らないし」

玲奈は少し変わった。

初めの頃に比べて、愛斗との生活に肯定的になってきた。

反対に、愛斗はそろそろ自分の体に帰りたくてたまらない様子ではあるが……。

「玲奈は困らなくとも、俺は困るんだけど」

「この私と共生してるんだから、文句言うなし」

「誰が相手だつたとしてもだよ。早く自分の体に戻りたい」

「まあ、戻るまで我慢しなつて」

会話が一段落したところで、玲奈は気になっていたことを尋ねてみる。

「愛斗つてさ、彼女いたことあんの？」

「は？ 唐突だね」

「ちょっと気になつたの。いいから答えてよ」

「へえ。俺は恋人はいたことないよ」

「そーなんだ。なんか意外」

「そうかな？」

自分の噂についていろいろな人に吹聴していた玲奈がそう思うこ

ところが、愛斗にとつては意外だつた。

「私が言うのもアレだけど、アンタさ、”あの噂”さえなければ絶対モテたと思うよ」

「んー、それはどうだろうね」

「絶対そう。顔はカッコイイし運動神経も良い。頭も良くて料理もできる。女の子の理想が詰まつたような人間じやん」

「そんなに褒められると照れるな）。まあ、もう手遅れなんだろうけどさ」

玲奈への皮肉を込めたのが伝わつたのか、玲奈は申し訳なさそうに俯く。

「それは……ほんと、ごめん」

「別に玲奈が悪いわけじゃないよ。中学の頃の俺が悪い。それに、玲奈が言わなくとも誰かが同じよう広めてたかもしれないし」

「アンタは悪くない！この1ヶ月で確信した。アンタは人を虐めたりしないってね」

「そう言つてもらえると嬉しいね」

1ヶ月前の玲奈からは信じられないような発言だ。

「私が責任取つて、アンタの彼女になつてあげよつか？」

「随分上からだね」

「初めての彼女がクラスで1番可愛い私になるんだから、当然じやん得意げに言う玲奈。

愛斗はここで、少しいじわるを思ついた。

「俺と付き合うつてことは、エッチなこともするけどいいの？」

この1ヶ月で分かつたのだが、玲奈はそういう方面の話に関しては初心だ。

今まで何人かの男子と付き合つてきた玲奈だが、いずれの相手とも手を繋ぐくらいにまでしか関係は進まなかつた。

玲奈自信が、がつついてくる男子が苦手で、相手がキスやそれ以上の行為を求めてくると急に冷めてしまうらしい。

玲奈は愛斗に過去の恋愛話を愚痴ることが多かつたため、愛斗はそ

のことを知つていてこの質問をしてみたのだ。

「……い、いいよ」

「……は？」

聞き間違いだろうか。

「だから、アンタとならエッチしてもいいって言つてんの!!」

「え、は?! なんで!?!」

予想外過ぎる返事に、愛斗は動搖が隠せない。

「1ヶ月も裸を見られたんだから、エッチなんていまさらでしょ。体が戻つたら、アンタの童貞を貰つてあげてもいいけど」

愛斗の動搖つぶりを見て、玲奈は少し勝ち誇つたような表情をしながらからかう。

「処女のくせに、偉そだなあ」

「な……!! アンタこそ童貞のくせにうるさい！」

愛斗からの強烈なカウンターパンチで、玲奈は顔が真つ赤だ。

「まあ、責任なんか感じなくていいからさ。玲奈は好きな相手とちゃんと付き合いなよ」

「あ、私は……やっぱ、なんでもない」

何かを言いかけて黙つてしまつた。

「いやーやつぱり言う！ 私は……アンタが、愛斗が好き！」

玲奈がそう叫んだ瞬間、辺りが突然眩しくなり視界が奪われた。

ようやく見えるようになり、玲奈は目の前の光景に驚く。

「え、愛斗……？」

「あれ？ 玲奈？」

「もしかして、戻つたの!?」

「たぶんそうみたい!!」

「やったー!!」

嬉しさのあまり、抱き合う2人。

「あ、そう言えば。元に戻る前、何か言つてなかつた?」

「え……もしかして、聞こえてなかつたの?」

「うん」

「じゃあ言わない」

そう言つて少し悪そうな笑みを浮かべる玲奈。

「えー、ケチ」

「ケチで結構」

「性悪」

「なんとでも言いなさい」

「処女」

「な!? うるさい童貞!!」

「あはははっ! それは怒るんだ」

真つ赤な顔で言い返す玲奈見てケタケタと笑う愛斗。

「それじゃあ、僕は家に帰るよ」

「うん。また明日ね」

「僕がいない間、のどかはちゃんとした生活が送れてたのかな……」

愛斗と玲奈がくつついていた期間は約1ヶ月。

つまり、その間はのどかが一人暮らしをしていたことになる。

家事が壊滅的にできないのどかを1ヶ月も一人暮らしさせていたのかと思うと……。

帰つて家の惨状を見るのが少し怖くなつた。

「ふう……」

玄関の扉の前で深呼吸をして覚悟を決める。

ガチャヤリ

「ただいま……」

リビングへ行くと、のどかがポツリとソファーアの上で膝を抱えながらテレビを見つめている。

「のどか、ただいま」

「え、愛斗……？」

愛斗が帰ってきたのが信じられないでも言うような表情を浮かべるのどか。

「うん。僕だよ」

ここで、1つの疑問が愛斗の中で生じた。
(のどかの中で、僕は何が理由で1ヶ月も家を空けてことになつてゐるんだろう)

存在を確かめるように、ゆっくりと愛斗の方に近づいていくのか。

「愛斗……ほんとに愛斗なのね……」

そして愛斗の目の前まで来ると

バチイイン！

強烈なビンタが愛斗の頬に炸裂した。

「今までどこ行つてたのよ!!」

「え、ちよ、のどか!?」

「この1ヶ月、アタシがどれだけ心配したと思つてんの!?

なかなか帰つてこないと思つて学校に電話したら、「そんな生徒はいません」つて言われて、喧嘩中だったお母さんに聞いたら「麻衣ちゃんに弟なんていない」つて……。

そんなはずないと思つて、麻衣さんに聞いたら………「妹のアタシ以外に弟妹はいない」つて……!!
「のどか……」

「アタシは信じたくなかった！　だつて愛斗がこの世界から急に消えるわけないじやん！　でも、誰に聞いても「桜島愛斗」は存在しないこ

とになつてた…。悪夢を見ているのかと思つたわ。でも全然覚めてくれないの…。何回寝ても、何回朝を迎えても愛斗は帰つてこない。

愛斗、アンタがいないと、アタシはダメなの！

アンタは…アンタは私の心の支えなのよ…。

だから、いなくなつたりしないでよ…。」

そう言つて、力いっぱいに愛斗を抱きしめる。

「ごめん、ホントにごめん」

「謝つたつて許さない…。でも、晩ご飯作ってくれたら許してあげる」

「分かつたよ、ありがと。何が食べたい？」

「ハンバーグ」

「冷蔵庫に何か入つてる？」

「ううん、空っぽ」

「じゃあ買い出しに行こうか」

「うん」

買い出しから帰つて、晩ご飯を食べた後、家の大掃除が始まつたのはまた別の話…。